

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集

平成22年度市内遺跡確認調査報告書

しき りょう

# 敷 領 遺 跡

平成23年3月

指宿市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、平成22年4月1日から平成23年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する数領遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、指宿市教育委員会で実施した。調査は渡部徹也が担当し、中摩浩太郎・鎌田洋昭の協力を得た。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体 指宿市教育委員会

発掘調査責任者 指宿市教育委員会

発掘調査担当組織員 指宿市教育委員会

教 育 長 田中 民也

教 育 部 長 吹留 賢良

社会教育課長 馬場 久生

社会教育係長 野元 伸浩

社会教育係主査 大道 裕子

社会教育係主事 前原 望

社会教育係主査 宮地 主税

社会教育係主査 池水 拓也

文 化 係 長 中摩浩太郎

文 化 係 主 査 上 蘭 浩司

同 上 鎌田 洋昭

同 上 渡部 徹也

発掘調査・整理作業員

林 美加子, 堂園真弓, 上玉利孝志, 吉元 妙,  
下拂喜代志, 濱田文男, 吉満淳子, 東 富子, 清 秀子,  
竹下珠代, 亀之園清子, 鎌田真由美

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、渡部徹也が行った。
4. 調査、及び報告書作成に要した経費2,000,000円のうち、50%は国、10%は県からの補助を得た。
5. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
6. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡Ⅲ』（1992、指宿市教育委員会）と『水迫遺跡Ⅰ』（2000、指宿市教育委員会）に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。  
土器の混和材【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】  
土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】  
調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】  
色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。
7. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれて保管し、活用する。

## 目 次

第1章 経緯と調査概要 .....	1
第1節 遺跡の位置と環境 .....	1
第2節 調査の履歴と調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の層序 .....	2
第3章 調査区の選定と調査の概要 .....	5
第1節 調査区の選定 .....	5
第2節 調査の概要 .....	5
第4章 調査成果 .....	6
第1節 1トレンチの層位と遺構 .....	6
第2節 2トレンチの層位と遺構 .....	11
第3節 1トレンチの遺物 .....	13
第4節 2トレンチの遺物 .....	14
第5章 まとめ .....	26

## 第1章 経緯と調査概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

敷領遺跡は、指宿市十町小字敷領、及びその周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

遺跡は、指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央、海拔4～10m前後の標高にあり、火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の北北西約2kmの地点に位置する。敷領遺跡の立地する扇状地は、北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川の両小河川に挟まれ、海岸に向かって緩やかに傾斜している。

### 第2節 調査の履歴と調査に至る経緯

敷領遺跡での調査履歴は以下のとおりである。

年度	調査目的	内 容
平成7年度	遺跡範囲確認調査	874年3月25日の開闢岳噴出物「紫コラ」で埋没した水田跡などを検出。
平成8年度	市営・県営住宅の建替えに伴う発掘調査	874年水田を面的に確認。奈良～平安時代の掘立柱建物跡、総柱建物跡等の遺構や多量の須恵器・土師器、墨書土器(「稲」「智」)を発見。古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代のベッド状遺構を伴う竪穴式住居跡を検出。
平成9年度	温泉タンクの設置に伴う発掘調査	874年水田と奈良～平安時代の柱穴群を確認。
平成10年度	市営・県営住宅の建替えに伴う発掘調査	水田跡、奈良～平安時代の建物群の広がりを確認。7世紀第4四半期の開闢岳火山灰「青コラ」で埋没した円墳「弥次ヶ湯古墳」を発見。

平成16年度には、お茶の水女子大学鹿野光行教授を研究代表者とする科学研究費補助金「特定領域研究」『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元—九州を中心に—』の研究プロジェクトに指宿地域が選定されたことから、以下のように敷領遺跡の確認調査を実施した。なお、下表で「大学」と表記したものは、お茶の水女子大・鹿児島大学の共同調査である。

年度	調査主体	内 容
平成17年度	東京工業大学	平成8年度調査地点南側で地中レーダ探査:平安時代の開闢岳噴火で埋没した広範囲にわたる水田跡と真北方向を向いた群の配置を確認。
	市教委・大学	2箇所のトレンチを設定、埋没水田の発掘調査を実施。
平成18年度	市教委	平成10年度調査地点北側において確認調査を実施。畠跡を検出。
平成19年度	市教委	西側一帯の状況把握のため、平成18年度調査地点の約50m西で確認調査を実施。大型の畦1条(大区画畦の可能性あり)と小型の畦2条を検出。
	大学	市教委調査地点の西側調査区(楠田地点)で畠跡を検出。
平成20年度	市教委	874年3月25日の開闢岳噴出物「紫コラ」で埋没した道跡などを検出。
	大学	874年3月25日の開闢岳噴出物「紫コラ」で埋没した掘立柱建物跡を検出。
平成21年度	市教委	874年3月25日の開闢岳噴出物「紫コラ」で埋没した建物跡と見られる壇状遺構を検出。
	大学	874年3月25日の開闢岳噴出物「紫コラ」で埋没した掘立柱建物跡を完掘。

敷領遺跡地内での平成7年度以降の各調査において、この地域において874年段階で大規模な水田が造営されていたことが知られてきた。平成20年度は、このような大規模な生産地を経営した集団の集落所在地を確認するため、5地点において確認調査を実施し、平成21年度には、火山灰で埋没した建物遺構の存在を確認するに至った。集落範囲やその詳細を把握することが今後の課題である。

## 第2章 遺跡の層序

敷領遺跡の層序は、橋牟礼川遺跡の基本層序とほぼ同様である(図2)。ただ、開聞岳火山灰層については降灰範囲の中心部分から北にやや外れていることもあり、堆積厚が橋牟礼川遺跡に比べ薄いことが特徴である。同時に、874年3月25日の噴火による降下火山灰堆積層(通称「紫コラ」)では、二次堆積物が発達している場合が多い。調査地点における細かな特徴については、調査成果の中でふれる。

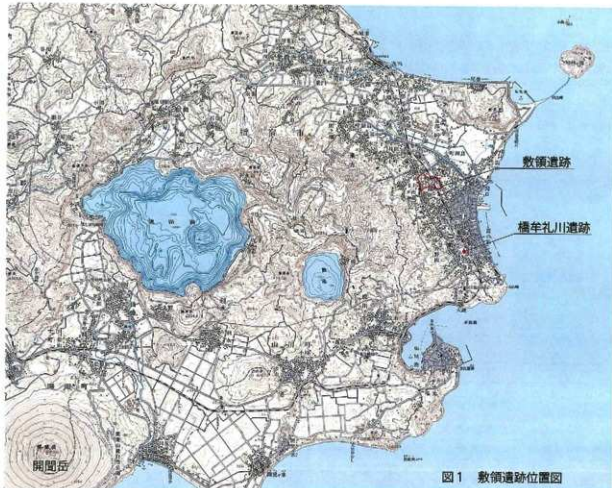


図1 敷領遺跡位置図



図2 層位模式柱状図

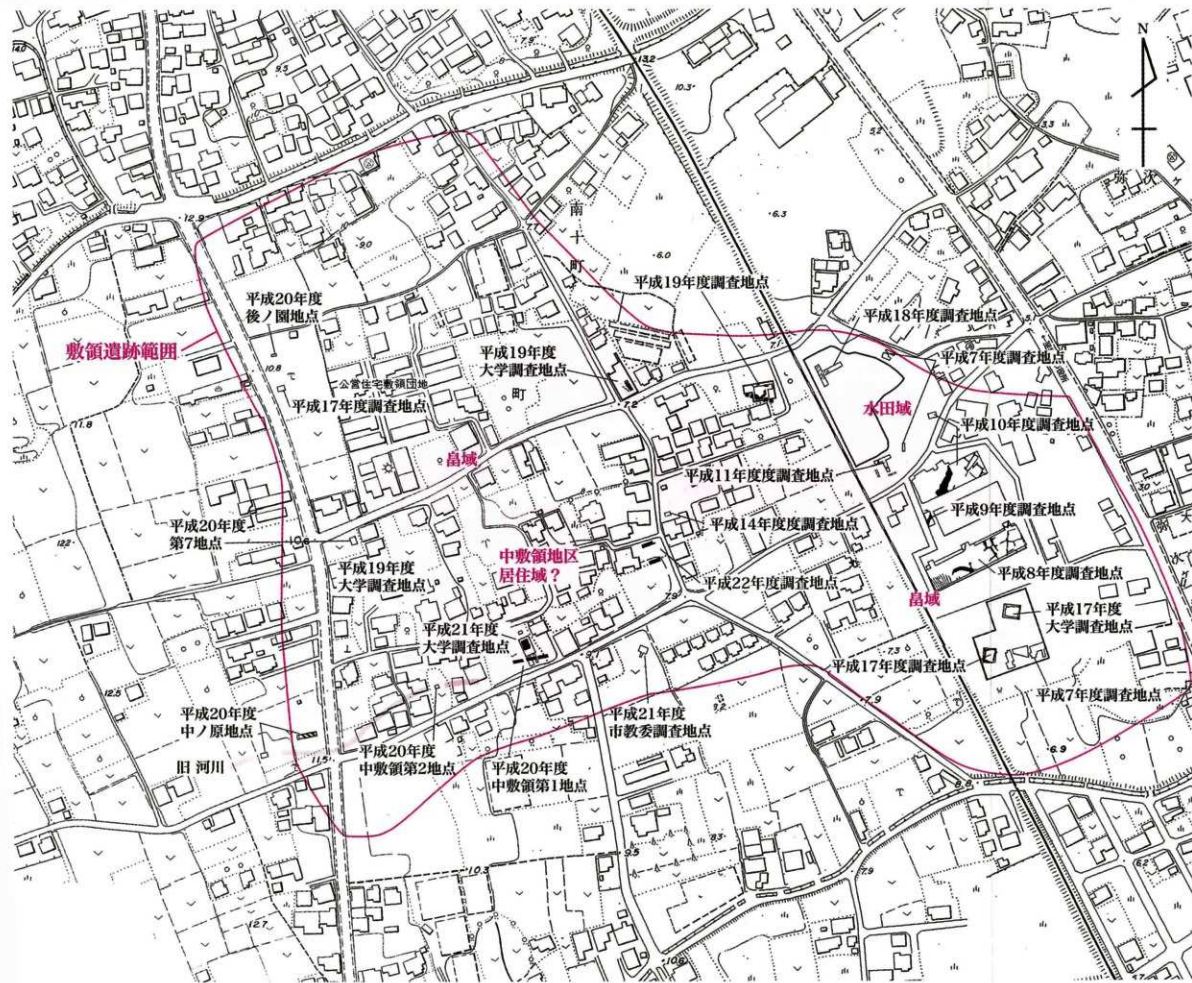


図3 敷領遺跡調査地点集成図と集落景観推定図

### 第3章 調査区の選定と調査の概要

#### 第1節 調査区の選定

これまでの調査によって、敷領遺跡では、874年段階で東側のより低い土地に水田が造営されていることが判ってきた。21年度においては、集落域についての情報を得るため、遺跡内のやや標高が高い西側一帯に注日し確認調査を実施。敷領遺跡中敷領第1地点（平成21年度大学調査地点）では874年の開闢岳の火山災害で埋没した建物跡を検出した。また、その東側約50mの地点（平成21年度市教委調査地点）では、同じく火山災害で埋没した何らかの作業場と考えられる壇状遺構が検出され、当該地が居住域である可能性が高まった。この調査成果を踏まえ、居住域が東側にどこまで広がるのかを確認するため、平成21年度市教委調査地点の北東約50mの地点を選定し調査することとなった。

#### 第2節 調査の概要

調査地点は宅地であり、かつて木造家屋があったが、現在は取り壊され更地になっている。木造家屋があった部分避ける形で、敷地内の南端と北端に2個所のトレンチを設定し調査を行った。

南端に設定した1トレンチは、2.5m×7mで、古墳時代の包含層まで確認した。紫コラ直下では、遺構は確認されなかった。874年時点の旧地形は、トレンチ中ほどまでは平坦であるが、途中から北東側に大きく傾斜していた。第6層中の出土遺物は、ローリングを受けた成川式土器とみられる細片が散見される程度であった。第9層中からは、焼き火跡と思われるカーボンの集中範囲と道跡が検出された。

北端に設定した2トレンチも、2.5m×7mで、古墳時代の包含層まで確認した。紫コラ直下では、6基のピットを検出した。また、調査区東側でおおむね北西—南東方向に延びる幅約1.2mの帯状の遺構とみられる高まりを確認した。紫コラ直下からは、須恵器の蓋をはじめ、数点の遺物が出土した。第9層からは、成川式土器の破片が出土したが、遺構は見られなかった。

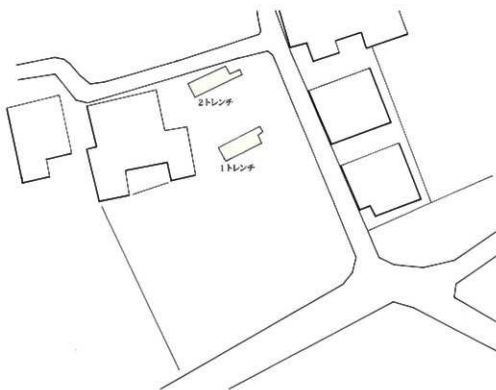


図4 22年度調査地点

## 第4章 調査成果

### 第1節 1トレンチの層位と遺構

#### (1) 層位について

第4層, 5層(紫コラ), 6層, 7層(青コラ), 9層, 第11層(暗紫コラ)を確認した。第4層は削平を受け本来の層厚は不明である。紫コラは10~30cm前後の層厚がある1次堆積で, フォールユニットが確認できた。6層上面は, 西から東に緩やかに上り, 調査区中ほどから大きく東側に傾斜する。また,

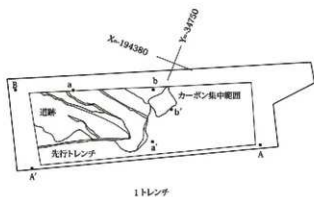
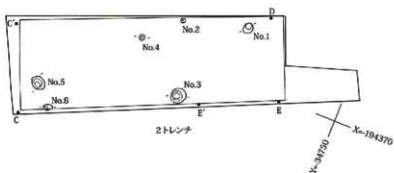


図5 トレンチ配置図 (S=1/100)



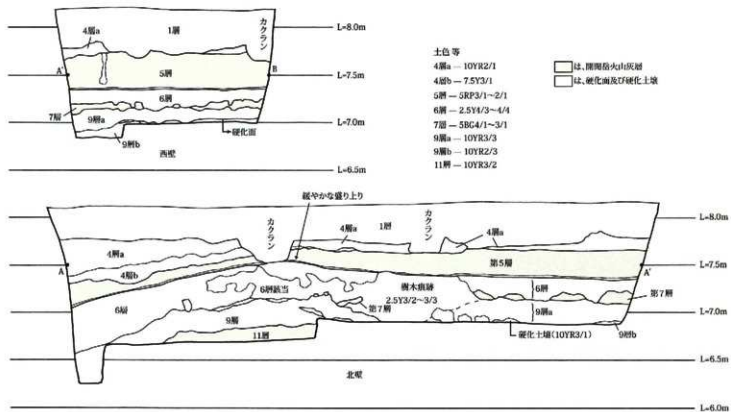
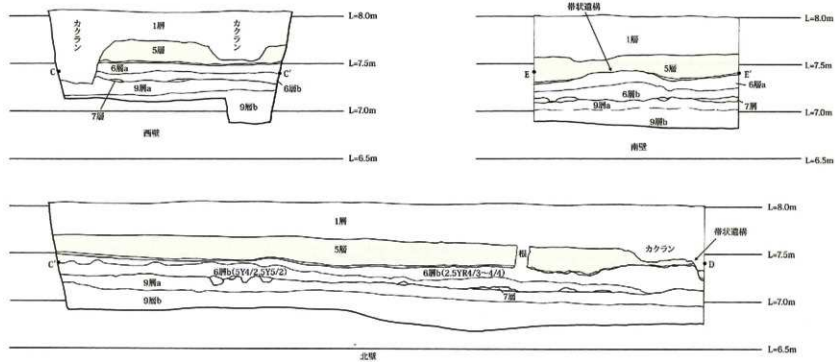


図6 1トレンチ層位断面図 (S=1/40)

図7 2トレンチ層位断面図 (S=1/40)



傾斜が始まる手前では、樹木痕跡と思われる土壌の乱れがある。その影響か、青コラもブロック状の堆積で、一定の厚さを持った層としての堆積はない。なお、9層中には道跡の硬化面と見られる硬い土壌が点在するが、これも樹木根の影響でブロック状の堆積となっている。

## (2) 遺構について

### ①カーボンの集中範囲

トレンチの中央付近、北寄りの地点で、第9層中にカーボンの集中範囲を確認した。カーボンは、約70cm四方の方形の範囲に集中して分布し、灰白色や赤色に変色した土壌も見られた。集中範囲の断面を観察すると検出面から浅い皿状にカーボンの多く含む土壌が堆積していたが、掘り込み等は確認できなかった。

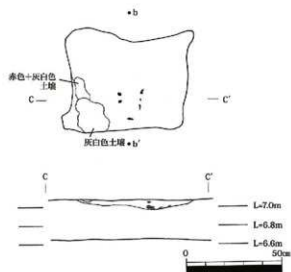


図8 カーボンの集中範囲平・断面図 (S=1/20)

### ②道跡

第9層中におおむね東西方向に走る道跡を確認した。

帯状の5枚の硬化面が同じ方向に段状に続くことから、複数回にわたる路面の補修が行われたものと推測される。もっとも古いのは、硬化面Aで幅約35cm、長さ約1.3mを確認した。路面はフラットである。その上に造られているのが硬化面Bである。幅約1m、長さ2.3mを確認した。硬化面Aとは約7cmの高低差がある。その上に造られているのが硬化面Cである。幅10～25cm、長さ約1.4mを確認した。硬化面Bとの高低差は約4cmである。その上に造られているのが硬化面Dである。幅約45cm、長さ約2.4mを確認した。硬化面Cとの高低差は約8cmである。最も上位にある硬化面Eは、幅約90cm、長さ約2.2mを確認した。途中で硬化面Cとの高低差はなくなり一体となる。いずれの硬化面も途中で消失しているが、これは、南壁層位断面で確認された樹木跡の影響を受けた結果と思われる。南壁層位断面を見ると、レベルにばらつきはあるものの硬化面と同質と見られる硬化土壌がブロック状に点在する。もともと、調査区を東西方向に横切って続いていた道が、後の時代の樹木の生育によって壊され、その結果、硬化面が無くなったものと思量される。硬化面Eが途中で無くなっているのもその影響であろう。

硬化面の厚さは、硬化面Dでは約10cmを測り、硬化面Bへ傾斜する斜面部分も硬い。

硬化面と非硬化面の硬さの差を把握するために硬化面Eについて、図9に示す30cm×50cmの範囲について土壌硬度試験を行った。その結果、硬化面Eの支持強度は、25.94kg/cm<sup>2</sup>で、非硬化面の支持強度は、21.4kg/cm<sup>2</sup>の値を得た。

硬化面Bを見る限り、道幅は少なくとも約1mある。硬化面も厚く、繰り返し補修され、利用されていると考えられることから、古墳時代、同地域の主要な通路の一つであった可能性を考えておきたい。この道跡がどう続くかは不明であるが、仮に、直線状に延びていくとすれば、その方向には、平成10年に確認された弥次ヶ湯古墳、平成8年に確認された古墳時代の竪穴式住居群のエリアに向かっており興味深い。

なお、先のカーボンの集中範囲は、この道跡より上位で確認されたもので、道の造営→カーボンの集中範囲の形成→青コラの堆積の順になる。

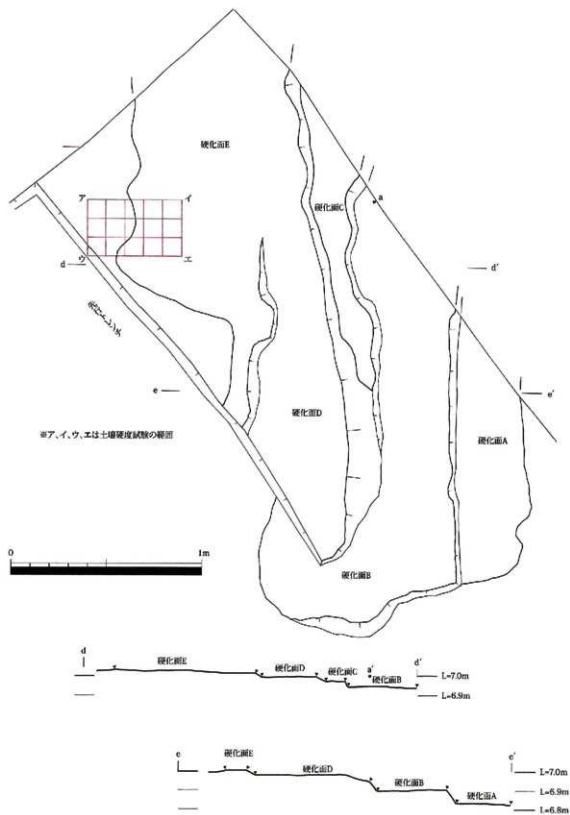


図9 古墳時代道跡平・断面図 (S=1/20)

## 第2節 2トレンチの層位と遺構

### (1) 層位について

1 トレンチと同様に、5層（紫コラ）、6層、7層（青コラ）、9層、第11層（暗紫コラ）を確認した。第4層は削平を受け残存していない。紫コラは20～30cm前後の層厚がある1次堆積で、フォールユニットが確認できた。第6層は、暗橙色を帯びる比較的柔らかい上層と暗オリーブ色を帯び、硬く引き締まった下層に細分できる。青コラの堆積はブロック状で、ほとんど面的には広がらない。

### (2) 遺構について

#### ①第6層上面で検出されたピット

紫コラの直下で6基のピットを検出した。調査範囲が狭いため、建物等、何らかのプランを形成するものかどうかは不明である。No. 1, 3, 5, 6は、紫コラを埋土とするピットである。火山灰降下時点では、穴があいた状態であったと考えられる。No. 2, 4は、暗褐色を帯びた第6層を埋土とするが、いずれも浅いため、遺構が否か判然としない。可能性があるものとして掲載した。

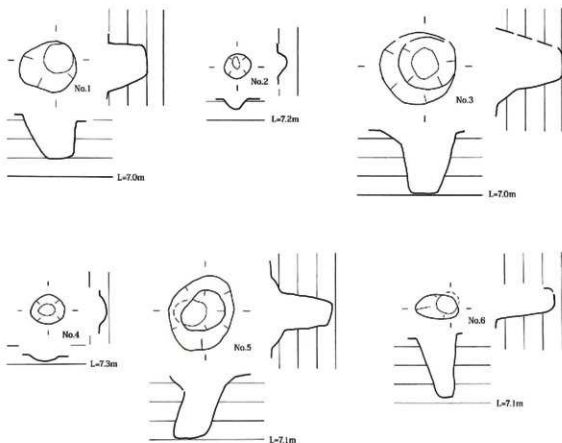


図10 平安時代ピット平・断面図 (S=1/20)

## ②帯状遺構

調査区東側で、おおむね北西-南東方向に延びる帯状の盛り上がりを確認した。紫コラを除去する際に掘りすぎてしまい、平面の形状を把握できなかった。北壁層位断面と南壁層位断面で確認した盛り上がりから平面を推定すれば、幅 1.2m 程度を図る。両サイドに同様の盛り上がりが見られないことや北壁付近では、盛り上がりの中央部分に紫コラを埋土としたピットがあることから、畑の畝の可能性は低いと思われる。

1 トレンチでも、6層上面は、西から東に緩やかに上り、調査区中ほどから大きく東側に傾斜する。図 6 に示した緩やかな盛り上がりの範囲が遺構であるならば、この帯状遺構に対応する可能性もある。平成 14 年度に確認調査が実施された本調査地点より 30m 北側では、874 年段階で水田が営まれているが、今回調査した 1、2 トレンチともに水田や畑と見られる遺構も建物遺構も確認されなかった。

断定はできないものの 1 トレンチで確認した緩やかな盛り上がりの範囲と帯状遺構は、居住域と生産域の境に設けられた境界の可能性も指摘され今後の周辺の調査が待たれる（中摩浩太郎敬示）。

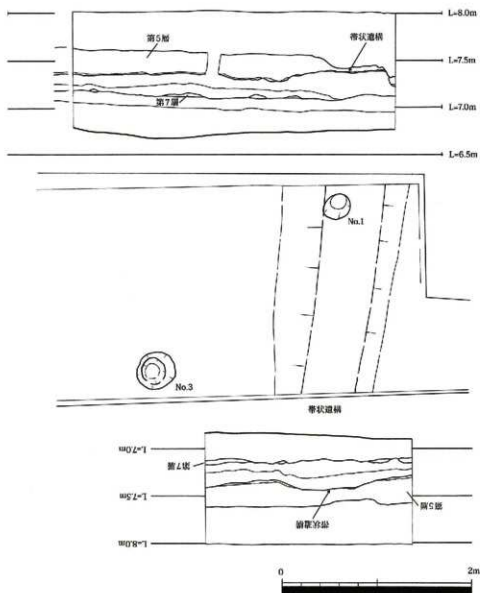


図11 帯状遺構平・断面図 (S=1/40)

### 第3節 1トレンチの遺物

第6層、及び第9層中から遺物の出土があったが、胴部と思われる細片資料がほとんどであった。以下に部位が特定できた資料3点を報告する。

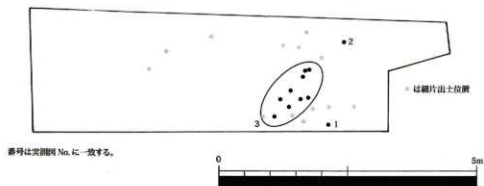


図12 1トレンチ出土遺物分布図 (S=1/75)

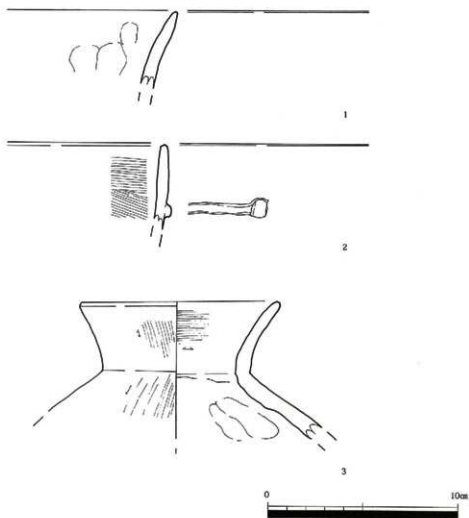


図13 1トレンチ出土遺物実測図 (S=1/2)

1は壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は緩やかに外反し、口唇端部は舌状をなす。内面にかすかにユビオサエの痕跡が残る。第6層から出土したが、古墳時代の成川式土器が混入したものと思われる。

2は壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。口縁部はほぼ直直し、口唇端部はやや丸みを帯びる。棒状の工具によって刻み目を施した一条の突帯が巡る。内面にはハケメが残る。第9層の出土資料である。

3は壺形土器の口縁部～肩部の破片である。口径は10.6cmを測る。頸部から口縁部はラッパ状に開く。口唇端部は舌状をなす。内外面にハケメが残る。第9層の出土資料である。

#### 第4節 2トレンチの遺物

第6層、及び第9層中から遺物の出土があったが、1トレンチ同様、細片資料がほとんどであった。以下に部位が特定できた資料24点を報告する。

4は紫コラの直下から出土した須恵器の蓋である。出土状況から874年の資料と見てよい。宝珠形つまみを有するもので、つまみのある中央部分は下方に落ち込み断面が緩いM字状を呈する。口縁部外面はやや湾曲し浅くくぼむ。直径は15.2cm、つまみ先端までの高さは1.5cmを測る。蓋の内外面に黒いリングの痕跡が残る。陶芸家の四元誠氏によれば、これは、坏身に蓋を被せ、さらに蓋の上に逆さまにした坏身をのせて窯づめし、焼成したために生じた痕跡であるという。つまみのある中央部分が下方に落ち込む形状となっているのは自重によるもので、この形状も窯づめの際の器の重ね方を想定すれば合理的に説明できると教示を受けた。

5も紫コラの直下から出土した須恵器の蓋である。4に比べると焼成が甘く十分に還元されていないため、内外面、器肉ともに乳白色を呈する。4に比べ蓋の内面は深い。

6は壺形土器の口縁部の破片である。第9層から出土した。口縁部はほぼ直直し、口唇端部は平坦である。

7は壺形土器の口縁部の破片である。第9層から出土した。口縁部はほぼ直直し、口唇端部は丸みを帯びる。

8は壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。第9層から出土した。口縁部は緩やかに外反し、口唇端部は平坦である。断面は3角形をなす一条の突帯が巡るが、残存範囲が少なく刻み目を施すものかどうかわからない。

9, 10は壺形土器の突帯部の破片である。いずれも第9層から出土した。突帯の断面は3角形をなす。10の突帯には工具による刻み目が施される。

11, 12は壺形土器の口縁部～突帯部の破片である。いずれも第9層から出土した。口縁部は外反し、内面に突帯が巡る。外面に廻る突帯は、上方に跳ね上がるように施されている。

13は壺形土器の底部の破片である。「充実した脚台」と表現される弥生土器である。第9層から出土した。

14～17は壺形土器の底部の破片である。第9層から出土した。いずれも上底で、15～17の脚台見込み部の断面はドーム状になる。

18, 19は壺形土器の肩部の破片である。第9層から出土した。18は小型の壺と思われる。19は断面3角形の1条の突帯が巡る。20は壺形土器の突帯部の破片である。幅の広い突帯にハの字に刻みを施すもので成川式土器の中でも世賀タイプと呼ばれる一群のものである。

21～23は埴形土器である。21はそろばん玉状の胴部は赤色塗彩されている。22も赤色塗彩されている。内面には一具袋状に成形した後絞り込んだ際にできた粘土のしわが残る（四元誠氏の教示による）。23は底部～胴部の破片であるが赤色塗彩はされていない。

24～27は高坏である。第9層から出土した。24, 25は坏部の破片で脚部に近い部分に1条の沈線が巡る。



口唇端部は舌状をなし、いずれも内外面ともに赤色塗彩されている。26 はやや膨らみをもつ脚部の破片である。27 は底部の破片である。

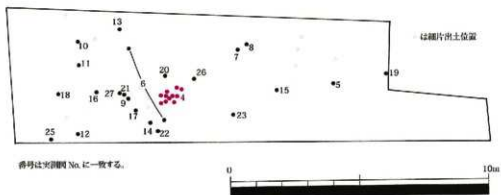


図14 2トレンチ出土遺物分布図 (S=1/75)

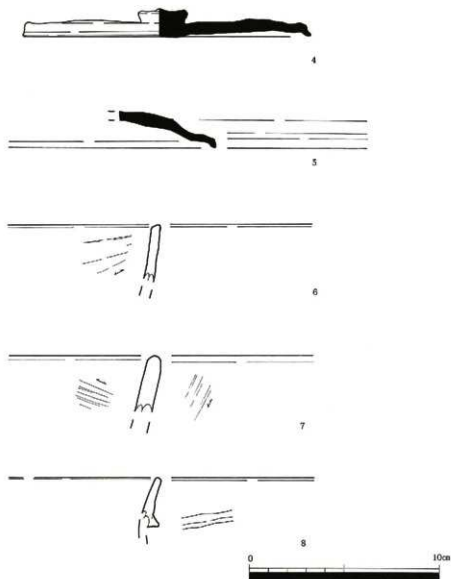


図15 2トレンチ出土遺物実測図1 (S=1/2)

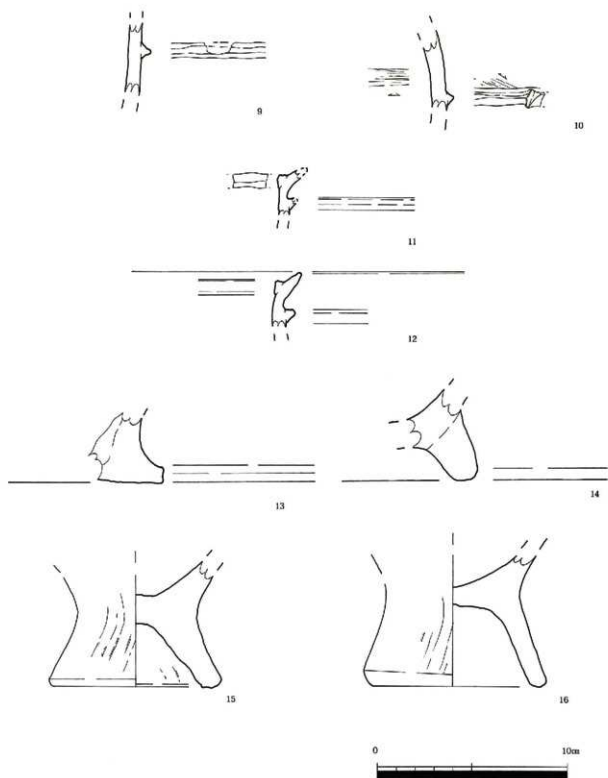


図16 2トレンチ出土遺物実測図2 (S=1/2)

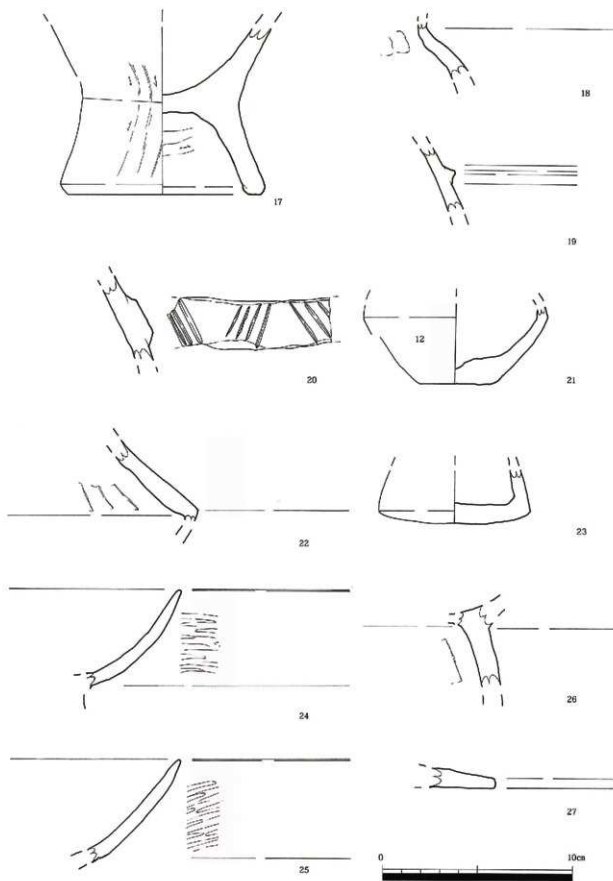


図17 2トレンチ出土遺物実測図3 (S=1/2)

# 遺物観察表 1

図No	取上げNo	部位	図説	保存状態(mm)	部位	色外	色内	色内	特徴	出土院	部材群	調査	その他	備考
1	9	覆形土器	破片	13編～ 14編	2.5YR4/3	10YR6/3	10YR5/1	-	彫刻をわずかに含む 彫刻型・線刻 刻を含む	カセ・ 白・灰・ 茶	内:エビヤンのリナデ 外:ナデ 1層:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
2	27	覆形土器	破片	13編～ 14編	10R4/2	2.5YR5/3	2.5YR4/2	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 茶・ 黒	内:ハケメ 外:ナデ 1層:ヨコナデ 突:ナデのち上真によるナゲ		焼成良好 黒をキーン	
3	4	覆形土器	破片	13編～ 14編	5YR5/4	5YR5/4	7.5YR5/3	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ハケメのリナデ エビヤサエ 外:ナゲ ハケメ ハケメ一帯のち ナゲ 1層:ヨコナデ		焼成良好 5.6.13, 14.13.17, 18.20.25	
4	37	3編土器	破片	13編～ 14編	5YR5/3	5YR5/3	2.5YR3/1	-	彫刻型を 含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:内面に黒や赤を帯び 外:黒や赤を帯び ヘラケズリ のち黒ナゲ・ヘラケズリ ツマミ・ツマミおしつけ		焼成良好 38.29.40, 41.42.46, 47.48.49.52	
5	43	覆形土器	破片	13編	10YR6/2	10YR6/4	10YR5/3	-	彫刻型を 含む	カセ・ 白・ 黒	内:黒ナゲ 外:黒ナゲ 1層:ヨコナデ		焼成不良	
6	50	覆形土器	破片	13編	7.5YR5/3	5YR5/3	2.5YR3/1	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:2層によるナゲのちナゲ 外:ナゲ 1層:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	55
7	57	覆形土器	破片	13編	10YR4/1	10YR5/3	10YR5/2	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:上真によるナゲのちナゲ 外:2層によるナゲのちナゲ 1層:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
8	58	覆形土器	破片	13編～ 14編	5YR5/3	10R4/3	2.5YR5/3	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ナゲ 外:ナゲ 1層:ヨコナデ 突:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
9	76	覆形土器	破片	13編	2.5YR5/2	2.5YR6/3	5YR5/2	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ナゲ 外:上真によるナゲ ナゲ 突:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
10	54	覆形土器	破片	13編	5YR5/2	7.5YR6/3	5YR5/3	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:工具によるナゲのちナゲ 外:工具によるナゲのちナゲ 突:ヨコナデのちナゲ		焼成良好 黒をキーン	
11	33	覆形土器	破片	13編	5YR5/3	5YR5/3	7.5YR4/2	-	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ナゲ ヨコナデ 外:ナゲ 突:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
12	82	覆形土器	破片	13編	10YR5/2	10YR5/2	10YR5/2	-	彫刻をわずかに含む 彫刻型・線刻 刻を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ナゲ ヨコナデ 外:ナゲ 1層:ヨコナデ 突:ヨコナデ		焼成良好 黒をキーン	
13	30	覆形土器 (張文)	破片	13編	7.5YR5/3	-	5YR6/4	黒 7.5YR5/3	彫刻型・ 線刻型を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内: 外:ナゲ 突:ナゲ 1層:ヨコナデ		焼成良好	
14	89	覆形土器	破片	13編	7.5YR6/3	10YR5/2	10YR5/2	黒 10YR5/2	彫刻をわずかに含む 彫刻型・線刻 刻を含む	カセ・ 白・ 黒・ 茶	内:ナゲ 外:ナゲ 1層:ヨコナデ 突:ヨコナデのちナゲ		焼成良好	

## 遺物観察表 2

図号	取上げ高	遺位	遺種	保存位置(m)	形状	色外	色内	色肉	色胎	粘土質	図説付	製法	その他	備考
15	73	9	黄砂土層	1/1保存 直径90cm	底部	5YR5/3	7.5YR4/1	7.5YR5/2	黧内 2.5YR4/2	砂粒をわずかに含む 細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:無調整 外:工具によるナズのちナズのちマメツ 内:一色工調整 調染:ヨコナダ		焼成良好
16	83	9	黄砂土層	1/1保存 直径70cm	底部	7.5YR5/3	2.5YR4/1	7.5YR5/2	黧内 2.5YR4/1	砂粒をわずかに含む 細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:ナダ 外:工具によるナズのちナダ 調染:ヨコナダ		焼成良好
17	30	6	黄砂土層	1/1保存 直径100cm	底部	7.5YR5/3	7.5YR5/2	5YR5/3	黧内 2.5YR4/2	砂粒を若干含む 細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:工具によるナズのちナダ 外:工具によるナズのちナダ 内:7.5YR5/2によるナダのちナダ 調染:ヨコナダ		焼成良好
18	51	9	小浜砂土層	破片	底部	7.5YR5/3	10YR5/2	10YR5/2	-	細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・赤・黄	内:ゴビヤサエ 外:ナダ	無調整	焼成良好 灰きヤモン
19	61	9	黄砂土層	破片	黄帯部	10YR5/1	7.5YR5/3	7.5YR5/2	-	細砂粒・細砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・黄	内:ナダ 外:ナダ 調染:ヨコナダ		焼成良好 灰きヤモン
20	71	9	黄砂土層	破片	黄帯部	5YR6/4	7.5YR5/3	10YR5/2	-	砂粒をわずかに含む 細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・赤・黄	内:マメツ 外:工具によるナズのちナダ 調染:ヨコナダのちキヤエ		焼成良好 灰きヤモン
21	64	9	黄砂土層	1/1保存 直径3.7cm	底部	5YR5/4	10YR5/3	10YR5/2	-	細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:無調整 外:ナダ及びのち赤色調整 調染:ナダ		焼成良好
22	70	9	黄砂土層	破片	底部	5YR6/4	7.5YR5/3	10YR5/2	-	細砂粒・細砂粒を含む	カ・白・黒・黄	内:しびら込みのシフ 外:キヤエのち赤色調整のちマメツ		焼成良好 灰きヤモン
23	72	9	黄砂土層	3/1保存 直径8cm	底部	5YR6/2	5YR4/1	7.5YR5/3	-	砂粒をわずかに含む 細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:ナダ 外:ナダ 調染:ナダ	無調整	焼成良好
24	一般	9	高坪砂土層	破片	下部	10R5/4	7.5R5/3	7.5YR5/3	-	細砂粒・細砂粒をわずかに含む	カ・白・黒・黄	内:フチのち赤色調整 外:赤きのみ赤色調整 調整:赤きのみ赤色調整	ハクラク	焼成良好 25と同一の程度 灰きヤモン 焼成あり
25	75	9	高坪砂土層	破片	下部	10R5/4	5YR5/3	10YR4/1	-	細砂粒・細砂粒をわずかに含む	カ・白・黒・黄	内:ナダ 外:赤色調整 調整:ハクラク 調染:ヨコナダ	ハクラク	焼成良好 25と同一の程度 灰きヤモン 焼成あり
26	56	9	高坪砂土層	破片	底部	7.5YR6/2	2.5Y5/1	7.5YR1/1	黧内 5YR4/1	細砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・黄	内:ナダ 外:ナダ 調染:工具によるナダのちナダ		焼成良好
27	65	9	高坪砂土層	破片	底部	7.5YR5/3	5YR5/2	7.5YR4/1	-	細砂粒・細砂粒をわずかに含む	カ・白・黒・黄	内: 外:ナダ 調染:ヨコナダ		焼成良好

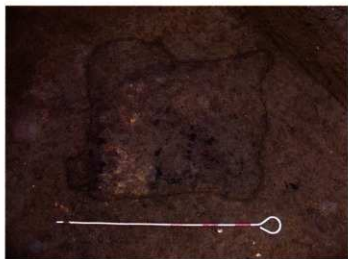
写真



1. 1トレンチ全景 (874年面)



2. 1トレンチ旧地形の横斜の状況 (874年面)



3. カーボン集中範囲平面 (灰白色や赤化した土壌が混在する)



4. カーボン集中範囲断面



5. 道跡検出状況1 (黒っぽい土壌が硬化面)



6. 道跡検出状況2



7. 道跡検出状況3



8. 道跡検出状況4



9. 硬化面の状況



10. 西壁、北壁層位と道跡の状況



11. 南壁層位断面1



12. 南壁層位断面2



13. 北壁層位断面



14. 2トレンチ全景 (874年面)



15. ビット検出状況 (874年面)



16. ビット完認状況 (874年面)



17. ビット No. 1 (埋土は紫コラ)



18. ビット No. 2





19. ビット No.3 (埋土は紫コラ)



20. ビット No.4



21. ビット No.5 (埋土は紫コラ)



22. ビット No.6 (埋土は紫コラ)



23. 須恵器蓋出土状況1 (実測 No.4)



24. 須恵器蓋出土状況2 (実測 No.4)



25. 西壁層位断面



26. 北壁層位断面

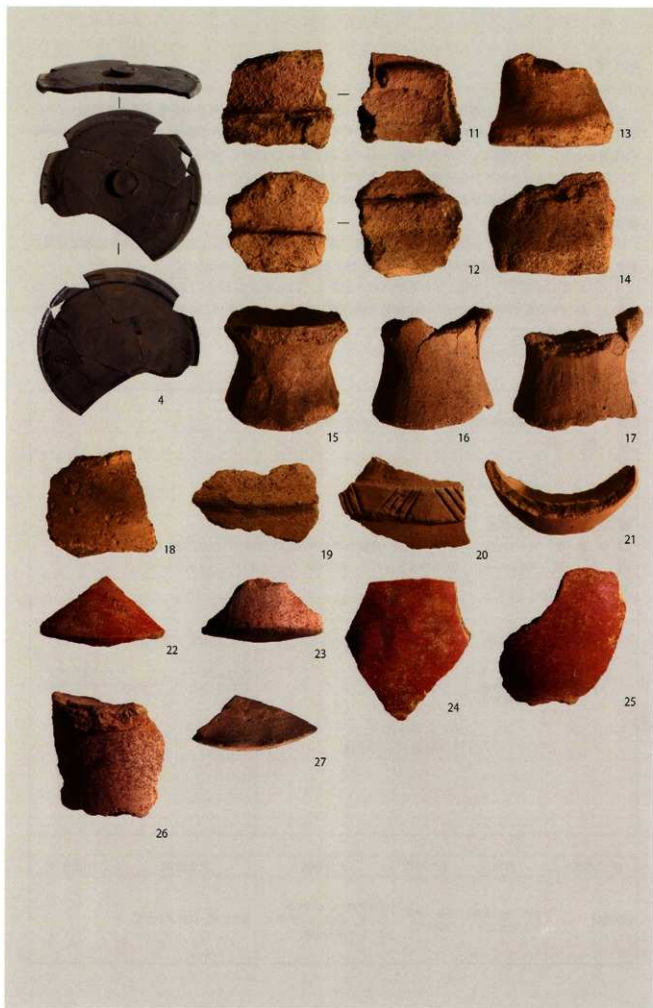


27. 带状遺構北壁断面



28. 带状遺構南壁断面





## 第5章 まとめ

今回得られた主な成果と課題を列挙しまとめとしたい。居住域の確認を目的に確認調査を実施したが、調査地点からは生産遺構、建物遺構ともに確認されなかった。1トレンチで確認した緩やかな盛り上がり  
の範囲と2トレンチで確認した带状遺構が一体のものであるとすれば、旧地形、及び現状の地形の傾斜、  
これまで周辺で確認されている遺構の種類ととまよりから集落内に設けられた境界の可能性も考えられる  
が、確認した範囲が部分的であるため、遺構の位置づけについては今後の調査成果も含め慎重に検討する  
必要があろう。

874年の直下から出土した須恵器の蓋から、窯づめの際の重ね方まで推定出来たことは有意義な成果で  
あり、今後も須恵器の表面に残る様々な痕跡に注意する必要性を改めて喚起した。

5回にも及ぶ補修を行った幅1mの古墳時代の道跡は、指宿地域では初めての検出である。橋牟礼川遺  
跡では、青コラ上面を利用しながら路面補修を繰り返した奈良～平安時代の道跡が検出されているがその  
例を彷彿とさせる道で、道の構造や造り方はもちろん、こういった目的で整備された道なのか、どこへつ  
ながるのか等、今後の調査に期待していきたい。

表5 報告書抄録

ふりがな		しきりょう						
書名	平成22年度市内遺跡確認調査報告書(敷領遺跡)							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第49集							
編著者名	渡部 徹也							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ)							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL:0993-23-5100							
発行年月日	平成23年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
敷領遺跡	指宿市十町 2246番地 (調査地点)	46210	2-58			2011.1.21 ~ 2011.2. 28	30㎡	市内確認調査 (国庫・県費補助 事業)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
敷領遺跡	集落・生産遺跡・ 火山災害遺跡	奈良～平安、 古墳時代	带状遺構(874年段階)、 ピット、道跡(古墳時代)、 カーボン集中範囲	須恵器蓋、成川式土器等				

